１３．管内繁殖肥育一貫養豚場での種豚及び哺乳豚の豚痘集団発生

玖珠家畜保健衛生所・1）大分家畜保健衛生所
○児玉彬・足立高士・羽田野昭・病鑑　平松香菜恵[1)]

【はじめに】豚痘（swain pox）は、豚の皮膚に丘疹や水胞、痂皮を形成する疾病である。国内では散発的な報告であるが、本県では初の発生になる。主な感染経路は接触感染やブタジラミによる機械的伝播とされており、豚房に限られた発生が多い。今回、管内の繁殖肥育一貫養豚場において、複数豚舎での集団発生を確認し、指導等を実施したので概要を報告する。

【発生概要】発生農場は、母豚 300 頭規模の農場で、豚舎は開放 19 棟、スノコ床形式で飼養している。2021 年 7 月 20 日、分娩舎 2 棟の全ての哺乳豚の体表に斑状病変があるとの通報を受け、当日立入を実施。稟告では 7 月 13 日頃から A 分娩舎の一部の哺乳豚に病変がみられはじめ、一週間後の 7 月 20 日に、A 分娩舎の母豚 6 頭、哺乳豚 257 頭及び隣接する B 分娩舎の母豚 5 頭、哺乳豚 195 頭に皮膚病変が見られるようになった。なお、それらは皮膚病変以外の症状はみられなかった。

【材料及び方法】A 分娩舎で皮膚病変を呈する哺乳豚 1 頭について定法に従い、病理学的、細菌学的及びウイルス学的検査を、皮膚病変を呈する哺乳豚 2 検体、種雄豚 2 検体についてウイルス学的検査を実施した。

【検査成績】解剖学的には、背、脚部等に直径 5-20mm の斑状痂皮病変、頭部等にまだら状痂皮病変が認められたが、その他の諸臓器に肉眼的変化は認められなかった。病理学的検査では、皮膚での有棘細胞の増生、風船様変性、核の空胞化、好酸性の細胞質内封入体の形成、痂皮の形成が認められ、斑状痂皮病変にグラム陽性球菌が観察された。細菌学的検査では、皮膚病変から *Staphylococcus epidermidis* が分離された。ウイルス学的には、解剖豚の皮膚病変、哺乳豚、種雄豚の皮膚スワブから豚痘ウイルス遺伝子を検出した。また、本ウイルス株のシークエンス解析による相同性は、既存株の Kagoshima11 株、Kaszsa 株等と 98～100％一致した。

【対策】発生豚舎及び分娩舎、種雄豚舎等において、豚舎及び豚体の消毒、豚舎間移動の際の手指消毒、豚舎内への野生動物侵入防止策等について指導。

【まとめと考察】上記症状及び検査結果から豚痘と診断した。豚痘は限られた豚房での発生報告はあるが、今回の異なった豚舎間での集団発生の報告は少ない。立入時にブタジラミが認められず、皮膚病変の状態を比較すると種雄豚の皮膚病変が最も古く、両分娩舎の間に種雄豚舎があったことから、当該種雄豚から人、野生動物等を介し母豚や哺乳豚へ拡がったことが推察された。なお、農場への侵入経路は不明であった。豚痘は流産を引き起こす報告があるが、流産を起こした Kagoshima11 株とシークエンスに差異がみられなかったことから、感染時期の違いや分娩舎と妊娠舎の管理者の違いにより発生しなかったことが推察された。また、指導の結果、対策以降の分娩で当該疾病の発生はみられていない。